

宗教改革記念日を覚えて

嶺 重 淑

今年も宗教改革記念日(10月31日)を迎えようとしていますが、4年後の2017年は、M. ルターが宗教改革を始めた年からちょうど500年目にあたり、この「宗教改革500年」を記念して、日本のキリスト教界でも新しい聖書翻訳の刊行等、様々な記念事業の準備が始められています。

私は今年の春、一週間の日程でドイツに赴き、ルターゆかりの地を訪ねてきました。訪れたのは、落雷に遭って死の恐怖を体験したルターが、父の反対を押し切って入会したアウグスティヌス修道院、ヴォルムス帝国議会後、帝国追放の身となったルターが10ヶ月間匿われ、新約聖書のドイツ語訳を完成させたヴァルトブルク城、そして、ルターが「95箇条の提題」を発表し、宗教改革が始まった町として知られるヴィッテンベルク、さらには、ルターの生誕地であると共に生涯最後の地でもあるアイスレーベン等々。どれもこれも印象に残るものばかりであり、今から500年前の世界に生き、福音の真理を解き明かそうとして波乱万丈の生涯を送ったルターの息吹に触れることができた貴重な旅となりました。

ところで、ルターが著した『キリスト者の自由』という書物は、宗教改革の代表的著作としてよく知られていますが、その冒頭部分にはこのような二つの命題が記されています。

「キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な主人であって、だれにも服しない。」
「キリスト者はすべてのものに仕える僕であって、だれにでも服する。」

(徳善義和訳)

ここには「主人」であると同時に「僕」でもあるというキリスト者の立場が示され、信仰によって神から自由を与えられた者は、他者に対しては愛と奉仕に生きるという旨のことが言明されていますが、私にはこの言葉が、関西学院のスクールモットー“Mastery for Service”に驚くほど似ているように思えて仕方ありません。

関西学院は来年創立125周年を迎えようとしていますが、その意味では、これまでのプロテスタント教会500年の歴史の4分の1の時期を共に歩んできたことになります。125年にわたる学院の歩みに感謝しつつ、また創立時の建学の精神を思い起こしつつ、創立125周年を迎える心の準備を始めていきたいと思います。

(人間福祉学部教授・宗教主事)